武蔵野日曜集会

キリストの血肉
――ヨハネ伝第６章52～71節――

１９９４年10月23日
小池辰雄

霊的具体性　永遠の生命　我に居れ　キリストに直結　四位一体　楽でしょうがない　キリストと一緒に告白　天的必然　活かすものは霊なり　キリストの霊的な血肉

【ヨハネ6・52～71】

52ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに
与えて食わしむることを得ん』53イエス言い給う『まことに誠に、なんじら
に告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。54わが
肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦え
らすべし。55それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。56わが肉をく
らい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。57活ける父の我を
つかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。
58天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此
のパンを食うものは永遠に活きん』59此等のことはイエス、カペナウムにて
教うるとき、会堂にて言い給いしなり。
60弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『こは甚だしき言なるかな、
誰か能く聴き得べき』61イエス弟子たちの之に就きて呟くを自ら知りて言い
給う『このことは汝らを躓かするか。62さらば人の子の原居りし所に昇るを
見ば如何。63活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、
霊なり生命なり。64されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』イエス初より信ぜ
ぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。65斯て言いた
もう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我に来るを得ず
と言いしなり』
66ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復イエスと共に歩
まざりき。67イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』68シ
モン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。
69又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』70イエス答え給う『わ
れ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の一人は悪魔なり』71イ

スカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを売らんとする者なり。

●霊的具体性

今日は『キリストの血肉』と題してお話します。キリストは霊的な現実の内容を普通の肉的な言葉で表している。それだから、その言葉に躓く。ちょうど、イソップやいろいろなお伽話では狐や狸がしゃべったりする。それは譬えをもって書いているわけですが、それをそのまま狐や狸がしゃべったりすると思うと躓く。キリストはお伽話と同じ話法を使っているわけです。

「聞く耳あるものは聞くべし」

とキリストが言われるが、全く聞く耳がないものだから、

「自分の先祖たちは荒野でマナを食べたけれども、あれは死んでしまった」

なんて、とんでもない疑問や質問をしている。ところが、

「天から降るところのパンは、これは死ぬことがない」

と、キリストは自分を「天から降ったパン」だと言っているわけです。説明なさらない。はっきりそう言っている。「私は譬えで言っている」なんて言わない。普通の肉的な言葉で霊的な内容を語っておられる。

「肉は益なし。活かすものは霊である」

と、後でキリストは言っておられますけれども。

51 **我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん』**

こういうキリストの言葉に躓く。また今のクリスチャンも本当はなかなか受けとっていない。霊的具体性を肉的な具体性で表現しているわけです。イソップやアンデルセンのお伽話は、その奥の世界を受けとらなくては。観念的な言い方をするよりも、具体的な言い方をした方が霊的な具体性を表すことになる。ところが、観念的な言い方をすると、それがまた観念になってしまって、内容が、具体性が非常に乏しくなってしまう。福音書のキリストの言葉を読むときには、そういうように読む。パウロは大分、ものを観念的な言葉で表しますけれども、キリストは非常に具体的な言葉で表している。それだから、キリストに躓く。

●永遠の生命

52 **ここにユダヤ人、たがいに争いて言う『この人はいかで己が肉を我らに与えて食わしむることを得ん』**

「どうして、その肉を食べられるか」

なんて、バカなことをユダヤ人が言う。ところが、キリストは相変わらず同じことを言っている。

53 **イエス言い給う『まことに誠に、なんじらに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。**

「人の子」というのは「救い主」の別な言い方で、「救い主なる人の子即ち私」ということです。「人の子」というのは旧約聖書のダニエル書に出てくる隠語なんです。「神の子」のことを「人の子」と言っている。

「罪の贖いをするところの人の子の、私の肉を食べず、その血を飲まなければ、汝らに永遠の生命がない」

ということ。「生命」「ゾーエー」というのは永遠の生命のことです。滅びゆくような生命のことは「プシヘー」と言うけれども、これは「ゾーエー」という字です。

54 **わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦えらすべし。**55 **それわが肉は真の食物、わが血は真の飲物なり。**

と。ヨハネ伝15章に、

「我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。」（ヨハネ15・1）

とある。ここでもキリストは「自分は真の葡萄の樹である」と言っている。普通の葡萄の木はウソかというとそうではない。それは葡萄の木だけれども、

「私が本当の葡萄の樹だ」

という面白い言い方をしている。この葡萄を食べれば、これは死なないというわけだ。

●我に居れ

「我に居れ、さらば我なんじらに居らん。」（ヨハネ15・4）

とある。この「居る」という言葉は非常に大事です。「我に居れ」というのは

「私の中に居なさい」

ということ。そうすれば、

「我なんじらの中にいる」

という。内在です。これは、相対しているのではなくて、中に入ってしまっている。それがこの「居る」ということです。本当の世界は「信仰」ではない。現実、現なんです。内在している世界です。

「キリストは神さまの懐の中にいた」

と書いてあるでしょ。「懐の中にいる」ということは、神さまと生命を一つにしている、内在しているということです。

胎児がお母さんのお腹の中にいるのと同じことです。内在です。だから、生命が通っている、血が通っている。お母さんは、胎児がいる時に美しいものを見たり、美わしい音楽を聞い

たりすると、それが全部、胎児の中に響いている。胎児をもっているお母さんは、美しい音楽を聞いたり、美しい内容の本を読んだりすると、それが全部、胎児に伝わっているんです。だから、お母さんがいい加減なことをしていると、子供がまたいい加減になる。それくらい、言葉で言うよりも、肉体的に一つの関係の時の方が非常に大事なわけです。胎教というのがそのことです、教ではないけれども。

「**救主**（すくいぬし）**である人の子の、私の肉を食らわず、その血を飲まずば**」

という内容は霊的なことです。肉とか血とかいう言葉をもって霊的な生命、肉、血を表している。

「私の霊的な具体的な生命を受けとらなかったら」

ということ。

「**食らう**」

というのは、むしろ

「その中に自分を入れる」

ことです。だから、こういう言葉に躓いて、なかなか受けとれないわけです。私たちは食物を食べる。そうすると、それが具体的に身体の一部分に溶けていく。そのように、キリストを霊的に食らうと、霊的生命にあずかるわけです。「食べる」という言葉を使って、

「霊的な私の生命につらなれ、食べろ」

と言った。つらなるよりも食べるという言い方のほうが非常に具体的です。「食べる」とか「飲む」とかいう。

●キリストに直結

これは祈りの世界で冥想するといい。キリストの中に祈入する、祈り入る。この冥想、メディテーションが大事です。冥想しながら、祈りの世界で自分をキリストの中に入れるわけです。信ずるのではない。信仰なんてのはダメです。私は、

「信仰はありません。キリストに直結しています」

と言う。直結です。キリストに直結しなければダメです。そうしたら、力が来てしょうがない。力が来て生命が来て、何か仕事を始めても、疲れをしらないことになる。グーッと力がくる。普通のクリスチャンはそんな現実を知らないね、観念信仰だから。

「信仰、信仰」

と言っている。

霊的生命、キリストの霊的な肉、霊的な血を食べたり飲んだりする。そうすると、キリストと一つになる。それを、

「**食べろ、飲め**」

という非常に具体的な表現で言われるわけです。

56わが肉をくらい、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。57活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。

キリストは神さまを食べていたんだ。

「我を見し者は父を見しなり」

というのがそうだ。神さまと同じ生命にあるから、

「私を見た者は神さまを見たのだ」

と、そんなことがはっきり言える。そうだよ、「神さま」なんて言ったって分からないもの。

●四位一体

キリストは絶対界にいるところの神を相対界にもたらした。キリストは天界にいたときにロゴス・キリストとして、神さまと一緒にロゴスの世界にいた。ロゴスというのは、ただ「言」と訳したのでは分からない。本当は訳せないんだ。それが

「肉となった」

とヨハネ伝1章に書いてある。

「1太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。2この言は太初に神とともにあり、3万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

とある。

「太初にロゴスあり、ロゴスは神と偕にあり。ロゴスは神なりき」

と、「言」と訳さない方がいい。全部、この「ロゴス」によって出来た。このロゴスというのは神さまの出店みたいなものだ。

4之に生命あり、この生命は人の光なりき。

霊的な光だ。

5光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。……

このヨハネ伝の最初の方は不思議な言葉だ。

9もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。……12されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。

ここではっきり、

「霊的な内容だぞ」

と言っている。それが肉体となって人の中に宿った。ロゴス・キリストが現実のイエスと

なって顕れた。

14言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。……18未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。（ヨハネ1・1～18）

我々は聖書を霊的現実として、言葉の奥をつかまえていかなければ、読んだことにならない。普通の人は霊的なんて言っても分からないだろうね。聖霊にあっての現実です。神はナザレのイエスにおいて肉として顕れた。また、祈りの世界では聖霊として顕れている。

「神・キリスト・聖霊は三位一体」

というのはそのことです。聖霊といえばキリストと神、神といえば聖霊とキリスト、キリストといえば聖霊と神という。とにかく、この三つは離すことができない関係にある。具体的な関係です。本当は四位一体なんだ。我々がその中に入っている。そうすると、四位一体なんだ。それでなければ、本当の信者ではない。四位一体を体感していないと、身体で感じていないと本当のキリスト者ではない。

●楽でしょうがない

だから、楽でしょうがない。楽で、楽しくて、力が来てしょうがない。

「そうですか、私みたいな者が一体になるでしょうか」

なんて思うけれども、私みたいな者だから一体にしてくださっている。我々の側の如何にかかわらない。それが絶対の恩寵の世界です、恵みの現実ですから。現実という言葉はいい言葉だね、現なる実のあるものということ。恵みというと、何か恵まれた物かと思うと、そうではない。恵みというのは「神・キリスト・我が一つになっている現実」が本当の恵みの現実です。絶対恩寵です。

「まだ私の信仰は…」

なんて言う必要は一つもない。私は、

「信仰なんかありません。ただ圧倒されているだけです」

という。我々は恵に圧倒されて生きている。それが本当のクリスチャンだ。だから、しょっちゅう平伏している。本当の姿は平伏しですよ。平伏していると思っていたところが、本当は立たせられる。ちゃんと立たせられる。平伏しと立たせられていることは一つになっている。分かりますか、私の言っている言葉が。そういうわけです。

あなた方、どういうお仕事をしていても、上から力が来てしょうがないですよ。力が来てしょうがないし、創造的になる、クリエイティブになる。物を創っていく。神さまは創造の神だからね。相手の人を活かしてしまう。

「何か知らないけれども、あの人には力があるな、光がきているな、生命があるな」

と、そういう存在です。おのずから身証している。身をもって証しする。日蓮も

「法華経を身証せよ」

と言った。単なる言葉ではないぞと。あなた方は、何をしていらっしゃっても、そのしている事柄自身において自ずから身証しているわけです。キリストの言葉を読んでいると、このキリストの言葉が楽しくてしょうがない。

57活ける父の我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。58天より降りしパンは、先祖たちが食いてなお死にし如きものにあらず、此のパンを食うものは永遠(とこしえ)に活きん』

と。イエスというひとは、そういうことをズバリズバリと言うひとだから、大変なひとだよ。恵に圧倒される。いいですね、皆さん、楽しいでしょうね。楽しくなければダメだよ。

「そうですか？」

ではないよ、

「全くその通りです！」

と言わなくては。司会者が祈ったあとで、本当にそうだと思ったら、皆さんは遠慮なく、男の人でも女の人でも、

「アーメン！」

と言いなさいよ。司会者も祈りがいがないよな、みな黙っていたのでは。みんな異口同音に「アーメン！」と応じなければ。もう少し生き生きとした集会でありたい。司会者独りでやっているのではないんだ。皆と一緒なんだ。どうぞ遠慮なしにどしどし声を発してください、一向差し支えないから。皆、おとなしすぎる。火が出るような間柄ですからね、かしこまっているのではないんだ。

●キリストと一緒に告白

ある集会では、ふたこと目には

「何々先生、何々先生」

と言っている。ダメだよ、なにが「何々先生」だ。キリストだ。キリストが本当にその人を通して語っているかということです。いわゆる先生中心主義はダメです。

「先生なんて言われるな」

とキリストがどこかで言っている。みな兄弟姉妹だ。本当の先生はキリストだけです。

そういう盛んな霊的生命の、光の交流の世界です。だから、キリストのこういう言葉が直ちにパーッと来なくてはいかん。

「あなたを食べるんですか、飲むんですか。はいっ、食べます、飲みます」

と。そうやって、こういう相対的な肉的な言葉を直ちに霊的な現実として受けとっていくわけです。そうすると、力が来てしょうがない。説明なんか要らん。

大体、聖書の解釈とか註解なんてことは私は嫌いだ。私のは告白なんだ。聖書の文字、

言葉の奥の世界に入って、キリストと一緒に告白している。我々の集会は告白集会なんです。聞いている人も告白的に聞いている。

「私が言っているんですよ、キリストではないですよ」

というくらいの気持でもって、あなた方は聖書を読んでください。そうすると、

「そうだっ」

とキリストが喜んでくださる。

「聖書は私が書きました」

と、それくらいに言わなくてはダメだ。

「そうか、お前が書いたのか」

とキリストは驚いてくださる。あなた方一人びとりが、

「新約聖書は私が書きました」

と言う、それくらいキリストと一つになっていれば凄い。これが本当の聖霊の世界だ。もう、問題ないでしょ、私が今はっきりと言ったから。

●天的必然

キリストがちゃんと言っているんだ。63節に、

63 **活かすものは霊なり、肉は益する所なし、**

と。肉的な言葉で言ったけれども、それは本当は、活かしているのは霊である、聖霊である。

わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。

死なないところの永遠の生命であり、聖霊の世界であるという。これは大事なところです。

66 **ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復イエスと共に歩まざりき。**

そのとおりだよな、躓いてしまったから。

「とんでもないことを言う人だ、私はとてもダメだ」

と皆逃げて行ってしまった。大体のクリスチャンは途中でいい加減で逃げて行ってしまう、

「教会の集会はもうごめんだ」

なんて。逃げて行って、今度は本当のキリストにでっくわせばいいよ、でっくわさなければダメだ。ここに集まっていらっしゃる方は少ないけれども、皆さん一人びとりは一騎当千なんだ、一人が千人を相手にするような。

「千万人といえども我行かん」

と孔子が凄いことを言った。孔子もなかなか宗教的な人間だ。孔子の教えではない。大体、教えなんていうのはみなダメなんだ。全部、告白です。ゲーテの詩もダンテの詩も全部、告白です。それはゲーテ自身が言っている、

「私の書いたものは全部告白だ」

と。説明や解釈ではない。アウグスティヌスも『告白』と言っている。我々の言うことは、皆さんの仰ることは全部、告白です。語らざるを得ない、自分を表現せざるを得ない、そういう世界です。ヒルティがこの「ざるを得ない」ということが非常に好きだった。

「ざるを得ないやり方でなければ本ものではない」

と言う。西郷南洲もそれ式な魂だった。

天的必然です。天的必然が本当の自由です。「自由、自由」なんて言うけれども、我がままな自由なんていうものはひとつも自由ではない。自分に捕らわれている。自分に捕らわれていることを自由だなんて言っている。自分から抜け出てキリストに捕まっていると、その天的必然が本当の自由です。だから、力がある。

リンカーンはゲチスバーグの3分間演説の中で、

「アメリカの政治はこの自由を失ってはいかん」

と言っている。アメリカの自由はあそこから始まっている。リンカーンというのは偉い。ワシントンよりもリンカーンだ。アメリカで一番素晴らしい人はこのリンカーンです。彼がアメリカをつくった。19世紀の政治家で素晴らしいのは、アメリカのリンカーンとドイツのビスマルク、イギリスのグラッドストーンの三人。これは三大人物です。日本にはそれだけの人物がいない。西郷南洲はそれに匹敵するような人物だった。明治天皇はなかなかの人物でした。大山元帥もなかなか大きかった。あれも鹿児島の人だ。私はとにかく明治37年に生まれたから、明治のあの辺から歴史的に大体知っています。

長兄の小池政美と母の小池光子の存在で私の今日がある。母はよく働いてよく苦労した。最後に失明してしまった。あなた方もお家の歴史がいろいろあると思いますが、こうむった恩を忘れてはいかん。恩返しということは、受けとったその人が本当にその人らしく生き抜くこと、これが恩返しです。そういう縦の関係の大切な消息は、どうもこの頃の人たちはいい加減にしているようだ。

●活かすものは霊なり

結局、問題はこの福音の内容、霊的な現実、キリスト中心ということです。これを受けとって我々はありがたいわけです、本当の人生の消息を知っているから。だから、福音はどうしても、皆さん一人びとりが何らかの意味で伝道しないともったいない。友人に、「来たりて見よ」と、私の集会に連れてきたって一向差し支えない。どんな方でもいい。どんな人でも、私はいい加減なことを言ってないから、何か打たれて帰るわけです。

63活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。

とキリストがはっきり言っている。

64されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』イエス初より信ぜぬ者どもは誰、お

のれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。65斯て言いたもう『この故に我さきに告げて父より賜わりたる者ならずば我に来るを得ずと言いしなり』

66ここにおいて弟子等のうち多くの者、かえり去りて、復イエスと共に歩まざりき。

多くの者が躓いて去ってしまった、「とても聞いてられない」と。こんなのはみな地獄行きだ。

67イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』

「お前たちも逃げていくのか」と。十二弟子の中で本当にとどまったのは何人かと、そんなもんです。ペテロは救われた。

68シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。

「あなたを棄ててどこへ行きますか。そんなことはできません。永遠の生命の言葉はあなたにあります」

と、さすがはペテロだ。「永遠の生命の言」の「言」は要らない。「永遠の生命はあなたにある」ということ。

69又われらは信じ、かつ知る、なんじは神の聖者なり』

こんな説明は要らない。

「あなたは贖い主である、救い主である」

とはっきり言ったらいい。余計な説明みたいな言葉を言っている。神の「聖者」という言葉はイザヤ書から来ている。

「ああ罪をおかせる国人、よこしまを負うたみ、悪をなす者のすえ、壊りそこなう種族、かれらはエホバをすてイスラエルの聖者をあなどり、之をうとみて退きたり。」（イザヤ1・4）

とある。「イスラエルの聖者」とはエホバの神さまのことです。9節に、

「万軍のエホバわれらに少しの遺をとどめ給うことなくば我等はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん。」（イザヤ1・9）

我等はソドムやゴモラの如くみな滅びてしまう。「遺れる者」ということ。あなた方は「遺れる者」の一人びとりです。本当のクリスチャンというのは遺れる民なんです。ふるいにかけられて残る。普通のものはみなふるわれてしまう。ところが、神の民として遺される。「遺れる者」とはそういう意味です。イザヤが言いだした言葉です。「ソドム・ゴモラ」は火に焼かれて滅び、死海の中に没してしまった。

●キリストの霊的な血肉

我々は永遠の生命がきてしまっているから「死」という言葉は要らない。「死んだ」なんていう言葉は要らない。

「あちら側に移りゆきました」

ということです。次の世界に移っていく。「往生」という言葉がそうなんだ。往きて生きるといういい言葉だ。キリストをいただいたから、キリストと生きているから、もう死を知らない。皆さん、楽しくないですか。私は楽しくてしょうがない。

「**わが肉は真の食物、わが血は真の飲物である**」

とある。断食というのは我慢するために断食するのではない。水は飲むけれども、断食するのはキリストを食べるための断食です。キリストを食べれば、ご飯を食べなくてもいい。断食をすると魂が澄んでくる。

天から降ったパン、キリストの生命の中に、霊的生命の中に入る、そういう冥想と祈りをしなかったら、「祈る、祈る」と言ったって、しょうがない。祈りというのはお願いではない。キリストの中に祈り入ること、祈入することです。それから、お願いしたかったら、何でもお願いしてください。叶いますから。キリストの中に入ると、身体の調子が悪いと思ったら、治ってしまったということになる。知らない間に治ってしまう。祈りの世界でキリストに按手していただくといい。キリストの霊の手が按手する。そういう祈りをしなさいよ。そうすると、力が来ますから。どこか具合の悪いところが治ってしまう。

ある人から手紙がきていろいろ質問してきた。

「あなたは私に質問をしたってダメだ。聖書を読んでキリストに質問しろ。そうしたら、あなたはキリストから答えをいただくから」

と返事してやった。キリストを抜きにして小池先生もヘッタレもない。

今日のところは非常に楽しいところで、

「**我を食らえ、我を飲め**」

とは、

「なるほど、キリストを食べるということはそういう霊的な現実でしたか」

ということ。

「**葡萄の樹に連なる**」

とあるが、葡萄の実を食べたっていいし、どういう言い方をしたって、中身を本式につかめば、それでいいわけです。聖書の言葉にすら私は躓かないし、またこだわらない。その奥の現実をつかんでいく。あなた方もだいぶん聖書の読み方のコツが呑み込めたでしょ。そういうわけです。キリストが本当は喜んでくださる。

「それが本当だ、そういう告白が本当だ。説明ではないぞ、告白しろ」

と。私は告白しているんだから。

「**我を食べ、我を飲み、永遠の生命に与かれ**」

という。こういう烈々たるキリストの言葉、キリストの血肉ということです。ただ信仰なんていうものではない。キリストの霊的な血肉を飲みかつ食べなくては。そうしたならば問題なしです。